

第1分科会記録

テーマ「障害のある子どもの理解と指導及び支援の充実のためのICF（国際生活機能分類）の活用」

研究報告者：徳永亜希雄（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所主任研究員）

金子 健（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所総括研究員）

実践報告者：小林幸子（静岡県立富士特別支援学校教諭）

溝端英二（和歌山県立紀伊コスモス支援学校教諭）

石川 誠（静岡市立番町小学校教諭）

指定討論者：山元 薫（静岡県総合教育センター指導主事）

丹羽 登（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特別支援教育調査官）

司会： 松村勘由（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員）

第1分科会では、まず徳永主任研究員より、本分科会の趣旨と内容について説明を行った。

研究全体報告として、徳永主任研究員より、研究の趣旨及び研究成果と「指導及び支援検討のためのツール」の紹介がされ、続いて金子総括研究員より「Web ツールの開発と実証」の報告があった。

その後、上記3名の実践報告者からの報告があった。小林氏は、「教職員間の共通理解のための活用例」として、「ICF 関連図作成手順（全体像版）」が教員間で共通理解を図りながら指導や支援を検討するツールとして有効であること、整理の方法を明示することの必要性があることなど、成果と課題について報告した。溝端氏は、「特別支援学校のセンター的機能の充実のための活用例」として、「ICF 関連図（主訴対応版）」を教育相談で活用した実践から成果と課題を報告した。石川氏は、「発達障害のある児童の支援のための活用例」について、通級指導教室担当の立場から「支援シート（ICF 関連図）」活用の有効性と課題について報告した。

続いて、指定討論者の山元氏より、「活用を支える研修の在り方」について、ここ6年間での研修ニーズの変化と模擬ケース会議についての話題提供があった。その後、報告者へ（溝端氏へ）中学校の先生との教育相談を実践される中で、ICF 関連図を活用された。この実践を通じて、相談者である中学校の先生もICFの知識が必要であると感じたか。もし、必要であるとしたら具体的にどのような研修が考えられるか。、（石川氏へ）小・中学校の通常の学級を担当する先生方の中で、ICF 活用の可能性についてのお考えを聞かせてほしい。の2点が質問された。丹羽氏は、「特別支援教育を巡る動向を踏まえて」という視点から、ICFの考え方を踏まえた指導の大切さとICF 関連図等の活用について話題提供した。併せて報告者へ（徳永主任研究員へ）ICF 普及のための方策をどのように考えているか。、（小林氏へ）研究協力者の小林氏以外でもICF 関連図を作成することができるか。の2点の質問をした。

（以上、要項 P.20 参照）

<指定討論者の質問に対する回答>

徳永： 普及は大切な課題であると考えている。「実践にいかに関与つか」という視点を重視して普及に努めている。Web サイトの活用、セミナー、書籍の発刊、学会発表など多層的に取り組んでいる。この普及をしていく際に、特に配慮していることはICFについて部分的な解釈にならないように説明している。

小林氏：「ICF 関連図手順（全体像版）」は、マニュアルが整理されているため、それに従えば可能だが、作成過程の作業の一つ、実態に関する内容同士を関連付ける作業については、特別支援教育の教職経験が浅い先生にとっては難しさがあることも認められた。

溝端氏：特別支援教育を理解していく上では、中学校の先生方にICFを理解していただくことは有効であると考えている。研修については、「ICF」ということばを前面に出さずに進めること、模擬ケース会議のモデルなども先生方のニーズに合わせて工夫することなどが大切ではないかと考える。

石川氏：小・中学校の先生方にも、ICFの考え方（概念図）は理解していただきたいと思う。ICFの活用については、個別の教育支援計画の捉え方と同様に、小・中学校の通常の学級においては「必要に応じて」活用し、特別支援学級及び通級指導教室においては「可能な限り」活用するということが必要だと考える。また、小・中学校へのICFの普及においては、通級指導教室担当者の役割が大きいと思う。

<参加者との質疑応答>

参加者：小学校の教員をしている。ICF 関連図を活用することで子どもの示す負の行動の背景や原因を明確に捉えることができるということを感じた。ICF 関連図を作成する際に分類に迷った。その際に的確に分類できるためのツールなどはないのか。

徳永： 分類の難しさがあることは事実。関連図作成の目的が子どもの全体像を把握することであれば、分類に多大な時間をかけずに「仮に置く」という考え方で、作業を進めていく中で必要に応じて置き換えるなどの手続きをとることが有効だと思う。

参加者：小学校で特別支援学級担任と特別支援教育コーディネーターをしている。通常の学級に在籍する児童のケース会議をする際に、独自のシートを活用している。ICF 関連図は、他機関や他職種との連携に有効であると学んだ。今後のことを考えるとこの独自のシートを ICF 関連図に替えていくべきか。

徳永： ICF の活用の利点は、情報の偏りや見落としが防げることである。ケース会議の目的に応じて使い分けられることも利点である。しかし、ICF 関連図は、必ず使うべきものではない。様々な実践事例をみていただいた上で、「これは使える」というところをご活用いただければと思う。

丹羽氏：ICF の考え方は、全ての先生に理解してもらいたい。しかし、活用の状況は、様々である。本研究で紹介されている実践事例もその中のひとつである。

<まとめ>

最後に松村上席総括研究員より、謝辞に加え、本分科会を通して、障害のある子どもの指導と理解及び支援の充実のための I C F の活用への理解と実践に向けて取組が広がっていくことを願っていると述べられ、閉会した。